事例 1

市民協働で
公立文化施設のあり方を更新する

調査対象

【コーディネーター】

長野隆人（いわき芸術文化交流館アリオス 支配人）

【関係者】

阿部峻久（特定非営利活動法人Wunderground／いわき潮目文化共創都市づくり推進実行委員会 実行委員長／はまから 代表）、稲田雅子（いわき市立鹿島公民館 館長／アリオスコミュニティ 事務局長）、小野寺孝晃（TATAKIAGE Japan 代表）、亀岡点（いわき市立平第三中学校 教諭）、木村剛（いわき商工会議所中小企業相談所企画グループ 主任主査）、小林尚稔（いわき市農林水産部農政流通課 農産物流通係、元・文化振興課）、下山田誠（いわき市田人支所 支所長／いわき芸術文化交流館アリオス 前・副館長）、杉浦友治（いわき市立美術館 館長）、鈴木修典（「まちポレいわき」「ポレポレシネマズいわき小名浜」株式会社名画座 代表取締役／元・平商店会連合会 会長／元・いわき市PTA連絡協議会 会長／平まちづくり協議会 会長）、前澤由美（特定非営利活動法人いわき緊急サポートセンター 理事長／こども♡あいネット 副代表）

事例調査から見えてきたポイント

◎ 市民の創造性を起点に市民協働をコーディネートする

- 公立劇場・ホールの既存事業の枠外で、モヤモヤしている市民との接点を探る話し合いや交流から多様な市民活動が生まれていく。
- 市民協働や地域活性化に向けて、地域の文化施設は人材やノウハウ、ネットワークなど施設の持てるリソースを総動員するという姿勢が求められる。

◎ 事業の付属的な広報から、広聴的な役割をもった館全体の司令塔へ

- 広報は、館や事業の広報的な役割にとどまることなく、市民や地域の窓口となる広聴的な機能を担い、館全体の運営方針をリードするポジションでありたい。
- いわきアリオスのように、広報紙に市民編集委員を加え、市民企画で子育てや演劇などへと姉妹媒体を派生させ、その編集・発行を通じて、情報収集と新たな活動につなげるのもひとつの方法。

◎ 来るものは拒まず受け入れてみる、連携先を絞らない

- 館に寄せられるさまざまな相談事に、イエス、ノーで接するのではなく、来るものは拒まずという姿勢で受け入れてみる、お手伝いできそうなところから関わってみる、という姿勢が次に結びつく。
- 連携先は文化関係にとどまらない。子育て団体や学校、商工会議所、地域のプロサッカーチームまで、さまざまな形で関係性を紡いでいくことが、文化を媒介にした新たな活動の種を生み出していく。

◎ 地域を担う次世代育成という視点を持つ

- 次世代育成を念頭に、若い世代の社会参画の場として、劇場やアート周りの仕事、芸術家の生き方などを中高生に知ってもらうことを意識する。

*1：2007 年に、美術家の藤浩志と共に、いわきアリオスや施設の前庭のように整備された公園、街なかを舞台に市民がやってみたいこと、大切だと思うことにチャレンジし、成功も失敗も含めて手探りで進めたプロジェクト。別名モヤモヤ会議。月に１度の会議を軸に進め、2008 年度末に市民のやりたいことを集めたフェスティバルを開催。翌 2009 年度は KOSUGE1-16 をホストアーティストとして継続。同時に、会議発案の「いわきぼうけん映画祭」を準備し 2011 年 2 月に実施。震災後は、避難所を巡る映画会や、市民と共に復興を考える「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」などを展開。

アリオス・プランツ！のロゴ
いわきアリオスから芽が出る
イメージで藤浩志が制作

- 例えばいわきアリオスでは、公演時の影アナウンスを市内高校生の放送部員が担うほか、新聞部や写真部などで活動する学生達が、プロの現場を体験できる機会を提供している。

◎ 地域文化拠点に求められる新たなベクトルと評価軸

- 90年代以降各地に「創造型劇場」が誕生し、2012年に劇場法が施行されて、公立劇場・ホールのあるべき姿が示されてきた。今後は、それとは異なるベクトルから、その先の射程を見据え、地域の文化的なつながりを総合的にコーディネートするような文化施設が求められている。
- そうした地域文化拠点には、これまでとは異なる新たな評価軸が求められる。

◎ 市民の創意工夫に寄り添い、市民に委ね、任せていく

- 市民の人を思いやる心、創意工夫する心に寄り添う存在として、地域の文化施設が果たせることを意識して事業を推進していく。
- 市民自身がコーディネーターとなり、地域全体でパフォーマンスをあげていくために、市民の発想や意欲に委ね、任せていくことが、地域の文化拠点の広がりを生む。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

長野さんのコーディネーター業務は、(1) 市民の創造性を起点にしたコーディネート、(2) 既存の文化施設とは異なるアプローチからの市民との接点を通じた支援、(3) 中心市街地活性化や文化施設連携、の 3 つに大別できる。

いわき芸術文化交流館アリオス（以下、「いわきアリオス」、インタビュー発言中は「アリオス」）は 2008 年 4 月に開館（第 1 次オープン）し、日本の公立文化施設で初めてマーケティング・グループ（現・広報グループ）が設けられた。マーケティングというと、チケットを売る、営業をするようなイメージがあるが、いわきアリオスではこのセクションを市民協働や街なか連携の起点とし、街や市民のさまざまな窓口になりつつ、市民協働のアートプロジェクトなどにも取り組んだ。長野さんは、グループ内で広報の専門性を活かした仕事を担当した。そして、2012 年からはチーフとして広報グループを率い、2020 年度に副館長心得となり、2021 年にはいわきアリオスの事業や運営全般を俯瞰、統括する支配人（副館長）に就任する。

(1) 市民の創造性を起点にしたコーディネート

いわきアリオスでは、開館当初から、何かに取り組みたいけれど何をしていいのか分からないというようなモヤモヤした想いを抱えた市民と共に、いわきアリオスや街なかで面白いことや大切なことに取り組む会議「アリオス・プランツ！」(*1) を行っていた。この事業は長野さんが配属されたマーケティング・グループが担い、この会議から「アリオス・パークフェス」「いわきぼうけん映画祭」「三函座リバースプロジェクト」（古い映画館の再生プロジェクト）など、多数のプロジェクトが立ち上がった。

東日本大震災後には、この会議メンバーが中心になり「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」を行い、そこからも「アリオス・こどもプロジェクト」などの新たな活動が始まっている。

*2：震災後に行った「アートおどろく いわき復興モヤモヤ会議」で立ち上がった「アリオス・こどもプロジェクト」が編集する媒体。市内の子ども向けイベントなどの情報を収集し発信している。

*3：「フラガールのふるさと」福島県いわき市を舞台に、全国から集まった高校生たちがフラダンスの実力を競う。

キッズ☆アリペ vol.112

【インタビュー調査の発言から】

- 「アリオス・プランツ！」で始まった「いわきぼうけん映画祭」は市民が主体でやることと公的なものとの接点に疑問を感じて、一旦はやめたが、同時期に立ち上がった「いわきポレポレ映画祭」（駅前の映画館が企画した映画祭）にぼうけん映画祭のショートムービー部門の要素を継続するような形で整理した。「アリオス・パークフェス」は、2018年の11月まで、4月から11月までの第2日曜日に計60回開催した。（長野）
- 「アリオス・こどもプロジェクト」は今も続いていて、市民の人たちで自走できるようになっている。これは“成長産業”だと思ったので、きちんと担当スタッフを付けて伴走してもらいながら、月に1度の「あそび工房」実施と「キッズ☆アリペ」（*2）の発行を続けている（長野）
- モヤモヤ会議（アリオス・プランツ！）にも参加しつつ、モヤモヤするのが苦手だったので自分たちは街で具体的に動きたいと思った。ただ、今思うと、アリオスはそういう活動を先進的にやっていた場所だとすごく感じる。当時は、まだイベント中心で、いわきにはアーティストと協働するようなアートプロジェクトのような動きがなく、土壌も全然できていなかった。（阿部）
- 震災以降、「玄玄天」というまちなかのアートフェスティバルを行った。それを経済などに結びつけるのではなくて、文化の土壌づくりにつなげていかなければならない。結局、そういうものがないとクリエイティブな視点や思考が育たないということを、ここ10年ですごく感じている。いわきは経済成長に合わせてどんどん産業を伸ばしていたが、アートを通じて、育む心を養う教育がなかなか生まれづらいと感じていた。アリオスを起点にそのような動きが芽生えた10年と感じた。（阿部）

(2) 既存の文化施設とは異なるアプローチからの市民との接点を通じた支援

長野さんは、いわきアリオスの広報紙アリオスペーパーの創刊編集長を務めた（～2016 年）。特徴的なのは、媒体の編集を通じて市民と協働する点だろう。そして、広報紙を媒介にして市民と多様な関係をつくり、そこから次世代育成も含めた実践へと進化させている。

いわきアリオスには公演時の託児にも対応するキッズルームがある。その活用においても、既存の文化施設にはない市民との接点や、市民協働の視点からアプローチしていている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民協働の媒体編集

- 僕は広報寄りの人間で編集などが強かったので、2010年から「アリオスペーパー編集部員」という市民のライターを集めていった。育成系のものに力を入れていくのがマーケティング・グループの一つの鍵になっていたことは確かである。（長野）
- アリオスペーパー編集部員は2017年まで活動した。その後は「エンゲキ☆アリペ」があり、山田亜希子（子育てや子育て環境に関心が高い市民）さんが「キッズ☆アリペ」をずっと続けている。（長野）
- アリオスがすべてやるのではなく、市民の人たちが主体的に情報を収集し、こちらは彼らができる裁量がどこまでなのかを見極めつつ、それらの情報のアウトプットを形にしていく。（長野）

□ 媒体の編集発行支援を通じた次世代育成

- 広報グループになった2012年度以降は、次世代の子たちに何かをもたらせないかというところに、活動の軸足を置いた感じになっている。（長野）
- フラガールズ甲子園（*3）では、高校生のフラダンス部の全国大会の広報紙「フラガールタイムズ」の編集発

行を市内高校の新聞部や写真部が行い、アリオスは活動室や印刷機、編集用 PC などを提供している。（長野）

- 「いわき太平洋・島サミット」という外務省主催のイベント（2015年、2018年）のサポートを観光交流課から依頼されたときは、高校生の広報チームを編成して、取材活動を行い冊子にまとめた。（長野）

□ キッズルームを起点に、多様な表現活動や地域の子育てを支援

- 「アリオス・プランツ！」の中で市民の山田亜希子さんが担当していた「アリオス・こどもプロジェクト」や、これまで100回以上続いている「あそび工房」など、市民ボランティアの人たちと一緒に子どもの遊びのイベントなどを毎月1回行ってきた。（長野）
- 「あそび工房」のボランティアの高校生には、「あそび工房」でダンスをやってもらったこともある。彼女は、その後学習院大学で教育学を学び、自分のゼミ生や教授と一緒にワークショップをやってくれた。卒論のテーマも「あそび工房」だった。（長野）
- 2012年に設立された「こども♡あいネット」という団体のメンバーとして、アリオスのカスケードで子育て支援団体が集まる「こども♡あいネットフェア」をやっていた。また、アーティストが子連れで来たときのリハーサル・本番での預かりも行っていた。（前澤）
- 当団体のアンケートでも「アリオスは母子ともに、憧れや気分が上がる場所」という声が多かった。（前澤）
- 既存の文化施設ではないところでの接点を受け入れられる場所というのを大事にしている。（長野）

⑶ 中心市街地活性化や文化施設連携～街のパートナーとして

「アリオス・プランツ！」から生まれた「アリオス・パークフェス」は年々規模が拡大して、いわきアリオスに面した会場の平中央公園には収まりきらなくなった。そこで、街の商店会青年部や NPO が主体となり、街なかの別の場所にも派生的に屋外フェスティバルが広がることになった。

また、「いわき七夕まつり」や「いわき街なかコンサート」、「いわきポレポレ映画祭」など、中心市街地で行われる「祭り」に参画することは、いわきアリオスと街なかでの催事を担う人たち双方が深く知り合うきっかけとなっている。長野さんは、ここでも媒体の編集という方向から街との関係を築いていて、そこには地域文化拠点として持てるノウハウを余さず街に提供するという姿勢が見てとれる。

また、中心市街地活性化の方法として、市立美術館や公民館との連携にも積極的に関わっているほか、市の文化事業と市民プロジェクトを連携させるなど、いわきアリオスの持つネットワークを活用した取り組みは幅広い。支配人としての長野さんは、街の催事の持続性にも配慮しながら、このような活動を通じて街との関係を深めつつ、いわきアリオスとして街の記録を蓄積させていくことも意識している。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民主導のプロジェクトからひろがる連携

- 「アリオス・パークフェス」はアリオスの立地する平中央公園で開催していたが、大体50くらいのお店で一杯になって、すぐに出店受け付けが終了になるようになり、街の若手がつくってくれた「三町目ジャンボリー」に流れて出店するということになった。（長野）
- その結果、アリオスといわき駅前を結ぶ経路ができ、NPO タタキアゲジャパンの方が、「大工町パークフェス」というのを立ち上げて、最盛期には、アリオスと三町目と大工町と、3カ所で同時に展開することもあった。（長野）

□ **地域文化拠点のリソースを活用して街の祭りに貢献する**

- 「いわき七夕まつり」実行委員会の幹事会に入っていて、毎年関わっている。また「いわき街なかコンサート」の実行委員会も十数年携わっている。（長野）
- アリオスで街の七夕まつりのパンフレットを制作しているが、そこではアリオスに蓄積したデザインや編集といった職能が生きている。仕事量は相当なものになるが、七夕の歴史が市民に可視化されるということで引き受けている。（長野）
- アリオスとしても七夕まつりを盛り上げるために、3日間のまつりの初日に、七夕飾りの審査をして、新聞号外にまとめて、翌日道行く人たちに渡して盛り上げるということも提案した。（長野）
- 「いわきポレポレ映画祭」では、アリオスも主催で入ってほしいと頼まれて参画している。アリオスペーパーで特集を組み、駅前の商業施設 LATOV や湯本の温泉宿古滝屋などから割引券やクーポンをいただく仕組みにして、市民が映画を楽しみつつ、市街地のにぎわいや、飲食店の活性化つながればと思っている。（長野）
- 商工会議所は、「いわきポレポレ映画祭」の実行委員会に入っていて、七夕まつり実行委員会では事務局を担っている。（木村）

□ **街との関係性を深め、街の未来を見据える**

- 七夕まつりは2年目からパンフレット編集予算を取った。これを通じて、街の人たちと仲良くなれるし、七夕の歴史を知ることもできると考えると、その価値はあると思う。（長野）
- アリオスと関係があまり近くなかった商店会の人たちとも、号外や取材先の話を通じていろいろな情報が集まる。また、主催公演のチラシやアリオスペーパーを置いてもらって、微力ながら貢献をしつつ関係性をつくっている。（長野）
- アリオスは、人を動かす上で中心的な機関。街なかのメンバーがそれをどう活かすかが重要。（鈴木）

□ **市立美術館や公民館などとの連携**

- 美術館では月例でアリオスとの連絡会を設けて、情報交換し、連携企画につなげようとしている。（杉浦）
- 今後はサーリネンの展示があるので、関係する映画を小劇場で上映する。そういうことのお膳立てを長野さんに相談する。美術館の担当学芸員は「いわきポレポレ映画祭」の実行委員にもなっている。（杉浦）
- アリオスがあるのとないのとでは、いわきの風景がずいぶん違ったと思う。それは一言では言えない広がりがある（杉浦）
- 公民館主催でアリオスの見学会（バックステージツアー）をやってもらった。公民館に足を運ぶ人はなかなかエリアを出ないので、いい機会になった。（稲田）
- 市の文化振興課が進めた「潮目文化共創都市づくり」とアリオスの関係性は、2018年にあそび工房と連携し、そこで作った「かかし」をリヤカーに乗せて白水町まで引いていって、その流れで講座をやって、さらに屋外アート鑑賞ツアーも行った。（小林）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 編集者からの劇場・ホール広報への転身

長野さんは、いわきアリオスに入る前は、クラシック音楽誌の編集者だった。いわきアリオスはクラシック音楽以外にも、ワールドミュージックや演劇・ダンスのほか、ジャンルにとらわれない事業を展開しており、

福島県立磐城桜が丘
高等学校放送局

*4：震災後の対応や、いわきアリオス開館当初の市民協働型プロジェクトについては、「文化からの復興～市民と震災といわきアリオスと」（水曜社）に詳述されている。

特に長野さんが所属したマーケティング・グループは、既存の舞台芸術のジャンル以外のところで市民との接点をつくることを念頭に置き活動していた。その手法として、市民協働によるアートプロジェクトも手がけ、現代美術のアーティストとの協働も行っていた。市民の意見に耳を傾け、関係性を築きながら、うまく化学反応を起こすようなノウハウを、当時の上司や同僚のやり方を見ながら身につけていった。

【インタビュー調査の発言から】

- もともとクラシック音楽やバレエの情報誌の編集で、コーディネーションといえば、インタビューで編集方針に合わせたヘアメークやカメラマンの撮影方法、インタビュー項目などを考え、それが誌面の中でどんな役割を果たすのか、必要な金はどうやって引っ張ってくるのかを、考えることだった。（長野）
- 「アリオス・プランツ！」などで、上司が市民の人たちとうまくやっていくのを見ていて、そのやり方を盗みつつ、幾つもの関係性を築きながら、良好にやっていくノウハウを得ていった。（長野）
- コーディネーターは、とにかく、マルチでいろいろなことに的確に対応しなくてはならない。（長野）

⑵ 東日本大震災を経て

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を経て（*4）、同僚の離職や上司の任期終了による退職などがあり、市民協働プロジェクトも形を変えていく。その中で長野さんが特に力を注いだのは、地域の子どもたちや子育て世代の人たちとの関係性を深めることだった。続いて、地域の高校生、特に愛情を込めて「マイナー文化部」と呼ぶ高校生達との連携を起点に、中学校も含めた学校との関係性を深めていくなかで、市役所からも、学生の話を聞きたいときには長野さんに相談が来るようになる。

【インタビュー調査の発言から】

- 高校生や中学生も含めて若い世代の社会参画の場として、劇場やアート周りの仕事、芸術家の生き方などを中高生に知ってもらうことを意識的にやってきている。（長野）
- 次世代育成というと、当然、聴衆や演じ手の育成もあるが、僕が意識しているのは、地域の劇場というのは、特に運動部や花形の吹奏楽部以外の子たちがやりがいを感じ、生きるために必要な自分の居場所や、活躍できる場所、社会の人に喜んでもらえる場を用意できるということである。（長野）
- 例えばアリオスでは、放送部の高校生が影アナウンスを務めている。卒業後も「いわき街なかコンサート」の司会のために進学先から戻ってきたり、マスコミに就職したりすることが起こっている。（長野）
- 中学校時代に全国大会出場や受賞経験のある中学生が、市内高校の放送部に入ると、自分とつながり、「フラガールズ甲子園」の MC や、アリオスの主催公演での影アナウンスなどをやることになる。（長野）
- アリオスは中学校の教員や生徒にとって頼りになる存在。（亀岡）

⑶ いわきアリオスの支配人に就任

長野さんは、前支配人が定年退職を待たずしてヘッドハンティングされた後、副館長心得という役職を経て、2021 年度より支配人（副館長）になった。それまで広報グループのチーフとして、事業のみならず施設の各セクションをつなぎ、市内の多様な団体とも連携を進めてきた長野さんが、館全体を俯瞰、統括する支配人のポジションに就くのは自然な流れだったといえよう。長野さんは、現在の新たな立場から、さらに街なかや市民との連携を深めていこうという意気込みを持っている。

【インタビュー調査の発言から】

- 言い方は悪いけれども、支配人というポストで直接お願い、発信することによって、動く物事も当然あると思う。そこを勘違いしない程度に把握しながら、より効果を上げていければとは思っている。（長野）

3. 長野さんのコーディネート業務の特性と成果

長野さんのコーディネートのスタイルを大別すると以下の 3 点に集約できる。(1)「来るものは拒まず」という精神で、市民や街からの要望を受け入れること、(2) アーティストのコーディネートのような狭義の文化的リソースだけではなく、媒体の企画制作、劇場が持っている機能なども含めていわきアリオスの持てるリソースを余すところなく提供すること、(3)次世代育成の視点も交えて、学生達が活躍できる場を用意すること、長野さんはその 3 つに力点を置いている。

そして、コーディネートの先には、相手の活動が持続できるかも見据えて、長い年月付き合っていく覚悟をしっかりと持つことが大切だという発言もあった。

いわきアリオスのように立派な文化施設の一般的なイメージは、地域の「文化の殿堂」で、市民にとっては非日常的で敷居の高い場となりがちだろう。長野さんはそこから離れて「日常化」の接点を探ることこそが大切だと指摘する。そこからは、学生の部活動や、ただ施設のロビーで過ごす人たちへのまなざしが、施設に拠点を置くコーディネーターに求められるということが浮かび上がってくる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域連携のキーワードは「来るものは拒まず」

- あそこは役所っぽくないからといって、いろいろな相談事が来る。基本的に来るものは拒まずという姿勢でいる。アリオスが、何か役に立ってくれるだろう、解決してくれるだろうと持ち込まれたものに関しては、公的であることが担保される限り、お手伝いできそうなところで関わりましょうか、ということがすごく多い。（長野）
- 満たしたいものが個人的な要望の場合は、無理だということはある。でも、その人たちも、アリオスの取組みを見て、こういうことだったら相談を持ち掛けても受け入れてくれると理解している。（長野）
- 建物を見た時は、閉じた施設なのかなと感じていたが、相談すると二つ返事で物事が進むと感じている。（小野寺）
- 学校から見ると、やはり敷居が高いと感じていた。でも、実際に付き合いをはじめると、気さくで付き合いやすいと感じる。（亀岡）

□ 街の雑用から子育て支援まで、持てるリソースを総動員してコーディネートする

- アーティストを介在させた地域でのコーディネーションも当然やるが、街の雑用的なコーディネーションもある。（長野）
- アリオスは子育て支援のコミュニティの一翼を担っているという感じはする。いわき市のこども家庭課などの事業には入ってはいないが、子育てコンシェルジュ（子育て支援相談窓口）の方々は、「キッズ☆アリペ」を参照してここのイベントなどを紹介したり、見に来たりして、ママたちに情報提供している。これは10年続いている。（長野）
- 前澤さんが副代表の「こども♡あいネット」は、いわき市の子育て支援団体が20近く入っている団体。その人

たちも、保健福祉センターで開催していた「こども♡あいネットフェア」という、活動団体が一堂に会すイベントを、2013年からアリオスでやらせてほしいと言って来たので「あそび工房」との共同開催という条件で受け入れた。イベントをやるための付き合いから始まったが、例えば各団体の取り組みを「キッズ☆アリペ」に載せる段階になると日常的な連絡が始まって、さまざまな情報が入るようになる。（長野）

□ 次世代の育成～文化施設から子どもたちがさまざまな職業を知るきっかけをつくる

- 柳家小三治独演会での影アナウンスを担当した男子高校生には、小三治さんがわざわざ彼の控え室まで来て、「いやあ、素晴らしかった。頑張れ、いい声だった」と声をかけてくれた。そういう風に、芸術家の表でやっている芸の姿と、裏での生態を彼らに見せることも重要。（長野）
- アリオスの一番近くの中学校の生徒たちが、玉川奈々福さんの浪曲公演を見て、映画も一緒に見て、奈々福さんに取材してもらった。浪曲師や曲師の生活や生態、芸術の魅力や、自分が中学・高校に進学するときのこと、将来どんな生き方をしてほしいかというアドバイスをもらったりした。（長野）
- 彼らには、創造的なことや手づくりで創意工夫をする現場を見てもらう。あとはマスコミの人など「憧れ産業」の人たちと出会ったり、地元ラジオ局や放送局のアナウンサーにアナウンスの部活動の指導をしてもらったりするだけでも、全然違うということがある。（長野）
- 「あそび工房」に参加した中学生がアリオスペーパーの取材を受けたことをきっかけにつながりができて、映画監督の周防正行さんにインタビューをさせてもらった。浪曲師の玉川奈々福さんへの帯同取材では、興味を持った生徒たちの働きかけで生徒全員が参加しての浪曲鑑賞教室が実現した。（亀岡）
- 生徒たちには、学校の外でしか学べないことがあると感じた。（亀岡）

□ 5 年後 10 年後を見据えた「覚悟」

- コーディネーター的な仕事を頼まれることは結構多いが、それを実際に引き受けると覚悟するときは、どうすればそれが継続できるのかを念頭に置いて、5年後、10年後にどのようなところまで行けるといいかイメージして引き受けている。（長野）
- そういう活動によって、地域にどういった花が開いていくといいなという懐勘定だけはする。（長野）

□ 市民のハレの場としてだけではなく、ケの時間の市民とどれくらい接点を作れるか

- 皆さんが文化施設に来るのは、年に1回か2回あればいいほうで、しかもそれはハレの日に来るという概念が昔からあり、そういう認識はたぶん変えられていないだろうと思う。（長野）
- 人口35万人の地方都市の市民の人たちは、それ以外の三百六十何日は大体ケの日を過ごしていると思う。そのケの日々の中で、私たちが提案できることは他にないのかということ。要は、ここに来て何かを見聞きする、練習する、発表するというだけではない接点をどれだけつくれるか。（長野）
- 前支配人の大石時雄さんも言っていたが、トイレに立ち寄るだけでも、中でお弁当を食べるだけでもいい。キッズルームで子どもが遊んで、親が世間話や子育ての悩みを話して帰ってくれるだけでもいいし、勉強する高校生たちがいてくれることでもいい。（長野）
- 接点となり得る可能性を、自分たち自身で否定しないことである。例えば、ロビーの机で勉強していたり、あそび工房を手伝ったりした学生が東京に行くと、「東京にそんなところはないですよね、アリオスはやはり特殊です。そういったところがあって良かったです」と言ってくれる。（長野）

*5：いわき市在住の地域活動家。「新復興論」で 2018 年第 18 回
大佛次郎論壇賞受賞

◎ 成果

ここまで見てきたとおり、いわきアリオスは、アリオス流とでも呼ぶべき独自の市民協働のスタイルを確立してきた。ただ、長野さんはその成果を謙虚に捉えている。街に派手な変化をもたらすのではなく、市民の日常が少し変わるくらいの変化でいいという視点は、コーディネーター業務を推進する上での大切な指標になると考えられる。

いわきアリオスが様々に用意してきた次世代育成の機会から、具体的な職業につながる人もでてきている一方、長野さんは、このようなコーディネート業務を地域文化施設が受け持つ上で、館内の理解はまだ十分に進んでいないかもしれないと指摘する。これからの文化施設では、市民協働、地域協働の視点を館で働く全員が持つことが肝要となるだろう。

最近、「アリオスコミュニティ」というアリオスの名前を付けた市民団体が立ち上がった。館の主導する事業に参加するだけでなく、地域文化施設の運営に市民自らが積極的に関わっていこうという姿勢からは、市民自治の萌芽を感じられる。そういうコミュニティが立ち上がること自体が、いわきアリオスが市民の声に耳を傾ける施設であるということの裏付けでもある。

【インタビュー調査の発言から】

□ 街の変化

- 街が変わったと言ってくれる人もいれば、ピンとこない人もいるだろう。それはどちらでもいいと思う。あまり派手な成果というよりも、日常がちょっとだけ変わっているというくらいでいい。（長野）
- いわき在住の地域活動家、小松理虔さん（*5）が話を聞いてくれたときに、アリオスの役割は「地域に文化という名の“漢方”を処方すること」ですねと要約してくれたが、継続的に投与することによって、地域の基礎体温が少しだけ上がったり免疫力がついたりすることが大事なんだと思う。（長野）
- ここに集ってくるいろいろな生態系の人たちのもたらすものが、変容とまではいかないけれども、市民生活に大なり小なり影響を与えていくということだと思う。（長野）
- 記者時代に感じたが、アリオスは県内の中通り地方、会津地方にも文化的な影響を与えている。（木村）

□ 行政や街からの信頼の獲得

- いわき市の文化政策ビジョンを決定するときに、市の文化振興課から中高生、大学生の声を聞きたいと相談された。アリオスは高校生が得意だからという感じで来る。（長野）
- アリオスで１～２年ボランティアをしてくれた生徒たちには感謝状を出している。それを、大学の推薦入試に提出する書類として使うと、皆さん早々に進学先が決まることが多い。すると、校長も進路指導主事も教え子がアリオスでのボランティア経験を武器に志望校に入れたということで感謝してくれるし、アリオスは学校の評価を高めることに貢献するところという認識も芽生える。（長野）
- 亀岡先生の中学時代の教え子で、高校時代アリオスでボランティアしていた人が、去年、新聞記者になった報告に来てくれた。また別の1人は、大学の芸術学部で映画を専攻するようになり、去年、周防正行監督が来た時も、後輩のお世話をしたり、影アナウンスのピンチヒッターを手伝ってくれたりした。（長野）
- 街のコーディネーター的な仕事への館内での評価はひょっとして低いかもしれない。事業にもなっていないし、急に余計な仕事も増えるし、今後の課題だとは思うが、対外的な評価という点では、商工会議所や商店会から感謝されることは、やはりマーケティング・グループや広報グループ案件だったりする。（長野）

- アリオスほど外に出て行っている文化拠点は知らない。（杉浦）

□ アリオスコミュニティ

- アリオスに要望を出すのではなく、自らが活動したいことに対して、アリオスや他の市民にどう手伝ってもらうかを話し合い、動かしていく場。あくまでも主導は市民というスタンス。（長野）
- 役員8人で、月に一度の定例会には15～20名くらいが出席する。（長野）
- アリオスコミュニティの事務局長を務めている。自分はアリオスの応援団という意識。交流ロビーの一部のカンティーネに置かれたままになっていたスタインウェイのピアノを活用する企画をはじめた。（稲田）

4. 問題点・課題

(1) 地域文化施設に求められる地域のコーディネート力と継続的な人材確保

1990 年代以降、全国各地に公立劇場・ホールが急増したが、当時は専門的な知識や経験を持った人材が不足しており、地域創造のステージラボなどを通して、公立劇場・ホールの運営に関する基礎的な知識やノウハウ、公演事業やアウトリーチなどを行うための専門性を備えるようになってきた。

しかし、今回の調査から、その次の課題が見えてきた。それは、地域の人に寄り添い、地道に伴走するような存在、つまり地域のコーディネートを担う立場としての地域文化施設あるいは機関が求められているということである。文化施設で働く人たちには、地域や社会と文化芸術の両方に軸足を置きつつ、市民目線からの発想や豊かな企画力、バイタリティ溢れる行動力や実行力が求められるだろう。あわせて、そういう機能を持った文化施設には、それに相応しい評価軸を考える必要もある。

また、グループインタビューに参加した多くの方から、長野さんのような仕事を担う後継者について心配しているという声が寄せられた。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域文化施設に求められるのは、企画制作力に加えて地域のコーディネート力

- 地域の文化施設はスタッフ内の発想の転換が必要な時期に来ている。劇場法ができてスタッフの専門性はこれだと思っているところがある。東京や大都市圏ではそれでやっていけるかもしれないが、地方だとそれだけではやっていけない。街の文化状況や、何があって、何が足りないのか、どのような人がいるのかという、マップが的確に分かり、更新されていて、その中で何が必要なのかを察知して、そのために必要なことをオーガナイズできる人材。さらにそれを、クオリティチェックできる専門性を持つ人材が必要だと思う。劇場の現場が好き、音楽が好きというだけでは、結局広がらない。（長野）
- アニメや食文化なども含めた文化や創造性が市民生活にどれだけ密接な関わりをもたらすか。この街のこの人とこの人とこの人を組み合わせれば、効果的に動いていくという地図と設計図を描いてくれる人のほうが、舞台芸術だけの専門家より、正直、街に活きていくだろうという感じはする。（長野）
- そういう人に価値を置いて、しっかり評価されるような枠組みが必要。求められるものは地域の人を大事にすること。そのために、文化施設が持っているリソースを、どう注入するかという究極的にシンプルな話だと思う。そこをやれる技をしっかり共有できるようにしたほうがいい。（長野）
- 時代に即してモデルチェンジができる組織体であればいいと思う。地方に行けば行くほど、そのモデルチェンジができないまま旧態依然としてやっていて、結局、だんだん地域の実情から離れていくという状況がある。

そこに対する危機感は持ってほしい。（長野）

□ 既存の枠外から考えられる発想と、予算がなくても進められるバイタリティを

- 役所も公立文化施設も、事業＝予算がないと成立しないし評価しない、という固定観念が強いが、予算がなくてもできる事業は多い。必要なものは企画書をつくって、組織内のコンセンサスを取って、どこかからお金を引っ張ってでも、事業として成立させるくらいのバイタリティがないといけない。（長野）
- 企画書は年間10本でも20本でも書いて、これが成長分野だと思ったらどんどんスタートさせるくらいのベンチャー的発想がないと、民間のスピード感と完全に離れていく。（長野）
- いつかお金がなくなったときに、どうやってお金を引っ張ってくるのか、助成金だけじゃないということは、きちんと知っていてほしい。（長野）
- 外に出るから味方ができて、資金はこちらが用意するから、アリオスはこういったところをやってくれという形で事業化できることもある。純粋に舞台芸術周りだけを見ていないで、お金の回し方や事業枠のつくり方を相当したたかにやっていけるような人が必要。純粋培養では困る。（長野）

□ 地域文化拠点には新たな評価軸が必要

- 今の文化施設の評価軸には、なかなか引っ掛からない形での成果なり手応えではある。お金をかけずに、活動する場所を用意して、応援していると、みんな頑張って、人材育成につながる。（長野）
- 館内での評価は低いかもしれない。事業にもなっていないし、急に余計な仕事も増えるし。その点は今後の課題だとは思うが、外からの評価という点では、商工会議所や商店会から具体的に感謝されることは、マーケティング・グループ案件だったり、広報グループ案件だったりする。（再掲）（長野）

□ 後継者育成について

- 長野さんの後継者の問題は気になる（杉浦）
- 長野さんの動き方が半端なくて心配になる。後継者について気になる。（木村）
- 長野さんの後継者をどのようにするか、人的な資産をどのように継承していくかが課題。（鈴木）

⑵ 市民と日常的にお付き合いできるような働き方、時間をどう設計するか

幅広く市民の声に耳を傾け、多彩な協働に携わるいわきアリオスであるが、市民に丁寧に対応する時間をどう確保するか、それを前提とした職員の働き方についても解決すべき課題があるという発言もあった。また、本調査では、他のコーディネーターからもコロナ禍で失われつつある無駄話の意義や必要性が共通して話題に上る。長野さんも、一見非効率と思われる対話の時間から重要なタネが出てくると指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民と対話する時間を、職員のワークライフバランスの中でどう設計するか

- 難しいのは、ワークライフバランス。市民と関わるといったら、市民の勤務時間終了後からの活動にどれだけコミットするかになる。市民の皆さんがきちんと時間を捻出して来てくださっているのに、こちらが規定の時間内でという訳にはいかないから、そこの働き方は課題。さらに、リモートで働いているスタッフが増えているから、スタッフワークをどう割り振るのかも含めて、すごく悩ましい。（長野）

□ **効率化は、非効率的なことをやるために**

- アリオスは開館当初から、本当によく外に出ていろいろなところを回って、移動中にもスタッフ同士で対話した時間がすごく大事だったと感じる。（長野）
- スタッフの時間の過ごし方と考えると、効率と非効率のはざまでせめぎ合うというか、非効率なことをやるために、効率化できることは極限までしてくれということになる。ルーティンワークはもっと切り詰められるだろうという話もしつつ、でも移動しながらどこかへ行って人に会ったりする非効率なことによって、それ以上の情報を得るためにやるという、その両輪をどうつくるか。（長野）

(3) 地域活動の持続可能性へのまなざし

長野さんが課題として捉えていることはいわきアリオスのことだけでなく、地域の持続可能性にまで広がっている。

【インタビュー調査の発言から】

□ **活動の持続性**

- 10年間やっていると担い手が疲れる。ライフステージも、結婚して子どもができると割ける時間が変わってくる。後継者にきちんとバトンタッチができるかどうかというのが、すごく重要（長野）
- コロナになって如実に感じるのは、街のイベントごとにしても何にしても、それがないと、みんな忙しいから会わなくなってしまうということ。中心市街地でも一部の商店街は、どんどん高齢化していて、この2年やれないだけで、もうできなくなってしまうだろうという話もある。（長野）
- 街の催事も実行委員会などで会って話さないと、情報として分からなくなってくる。そういったところに足を運んで、何が必要なのか、どんな応援、貢献ができるか。あとは、実行委員会で一人ひとりにあいさつするときに、聞き込むだけでも全然違う。（長野）
- 「いわきポレポレ映画祭」も赤字だが続けている。いずれ公共の仕事にする方がいいのではないかと感じている。継続的に文化的なまちづくりを担うのがアリオスの役割。民間では単発で持続性がないことが一番きつい。継続性を担保することによって、街の文化と経済が成り立つと考える。実はあまり見えないけれど、アリオスはその役割をきちんとやってきてくれた。学校で言えば教頭、校長、教育委員会、そういうところがどこまで理解を示してくれるか。やはり皆で情報共有する場をつくりながら、志あるものだけでもやっていかなければならない。その担い手の中心としてアリオスがある。（鈴木）
- 教育と文化がこれからのいわきを変えていくはずなのに、予算が付いていない。それがクリエイティブな活動につながり、地域に創造産業が根付くといいと感じる。（阿部）

5. コーディネーター推進の方向性

(1) 市民自身がコーディネーターとなるために文化施設ができること

コーディネーター推進のためには、文化施設にひとりのコーディネーターが居るだけでは不十分で、館のスタッフや市民自身がその考え方やスキルを学び、館内や地域で複数のコーディネーターが活動できる環境を整える必要がある。文化施設のスタッフには、地域のコーディネーターをマネジメントしていくという発想も必要だろう。文化施設の理念に共感できる市民にその役割を任せ、全体でパフォーマンスを上げることを視野に入れることが、今後は重要になると考えられる。

また、次世代育成ということに関連して、長野さんは、いわきアリオスで育った人たちが将来コーディネーター的な役割で外部から関わってもらえるようなことも見据えている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 地域にコーディネーターが多数いて、そのマネジメントをする劇場スタッフという未来

- 地元でアーティストとして育成し、それだけで生計を成り立たせることに限界を感じていることはどこもあると思う。コーディネーター的要素やコーチングを学んでもらい、後続の人たちのメンターになるなど、アーティストで一本立ちは無理でも、それ以外の要素で生計が成り立つという可能性もあるだろう。（長野）
- コーディネーションも含めて、地域で生きていくアーティストの仕事の選択肢を増やす。そういう提案をして、それを僕らが支援していったほうがいいのではないかなと思う。（長野）
- スタッフの仕事も、1つの現場の制作やアーティストとのやりとりよりも、地域のコーディネーターの数を増やして、地域全体でどのような効果を出しているのかを、きちんとマネジメントできる人材のほうが、アリオスの中には必要かもしれないと思う。（長野）
- 例えばアウトリーチについて、いろいろと意見もあり、市民からの動きが結構出ている。市民の皆さんから意見やアイデアがあるとき、施設としてイエスです、ノーですと言うだけではなくて、皆さんは何をどこまでやってくれますかと返して、協働や市民参画の方法を模索し、その人たちに委ねるなり、権限委譲するなりして、アリオスの理念に共感した市民の人たちと協働でパフォーマンスを上げていかなくてはならない状況にきていると思う。（長野）
- 大きな枠組みで市民を巻き込める動きが生まれるといい、その中心にアリオスがあるようなイメージ。（阿部）

□ 人材育成ではなく、次世代育成という視座～未来の街の担い手としての若い世代への期待と投資

- 演劇制作のための人材や、舞台のための人材の育成は、うちの企画制作課や施設管理課がやっている。そういう人たちを自前で育てていくのはいいことだと思うけれども、もう少し外からここを応援してくれたり、自分たちも次世代の子たちにこうしてあげたいという人が、少しでも増えていくといいと思う。それが結局、文化施設の豊かさにつながっていく。（長野）
- 現場できちんと次を育てたいというところもある。内部のスタッフだけではなくて、高校生や大学生が、10年後に、アリオスや街の担い手としてしっかり機能するような期待を持てる子たちを、どのような形であれ、育てたいと思う。（長野）
- メインストリームの生き方ではないけれども、生きていく上での補助線になるような考え方や枠組みをアリオスが意識的に用意することで、この芸術文化施設の可能性を広げられないか。（長野）
- 中心市街地だけで見ると、文化的視点より経済的視点が多くて、売上げにしかつながらない。そうではなくて、もっと面白いことをやって人を回遊させて人が巻き込めるような仕組みをつくるのが中心市街地の役割。そこの思考が変わるといい。（阿部）
- いわきは歴史的に見ても、産業主体の「文化不毛の地」。市町村合併によって多くの小・中学校を抱える教育委員会は多忙で動きが遅く、リーダーシップを期待するのは難しい。それぞれの学校や教員、生徒たちがプランを発案するなどして、文化と教育が両輪となっていくような部分をもっと進めたい。（亀岡）
- アリオスがアーティストとの地域活動をコーディネートして、小さい子どもでも将来の夢を見られるような地域になってほしいと考えている。（前澤）

*6：地域創造による調査研究報告書で提案された言葉。地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを意味する。
「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究―文化的コモンズの形成に向けて―」、2012-13 年度

⑵ 広報に対する認識を改めること

組織におけるコーディネート業務の推進には、全体を俯瞰できる位置づけが必要だと考えられる。いわきアリオスの事例からは、文化施設の中では広報担当がそのような横串を刺す役割を担うことで効果を発揮しやすいポジションだということが分かる。いわきアリオスでは、広報が街の人との窓口になって、施設と地域や市民とのコーディネーター役を果たしている。

文化施設の広報は事業や施設利用を広く市民に伝える役割だと考えられがちであるが、いわきアリオスの事例を見ると、広報セクションは文化施設が地域における文化的コモンズ（*6）を形成していくために重要な役割を担えるということが見えてくる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 市民の声を傾聴し、いわきアリオスの広報資源を活用して発信する

- 自分たちでもきちんと耳を開いて聞くということが、やはり大きな仕事だ。その中で、どのような人と人をどう組み合わせていくのか。あるいは、この地域に他地域と比べて足りないものは何なのか、それをどう処方するかを考えていく。横串を刺すとしたら、そういう観点でできるかもしれない。（長野）
- アリオスの場合は、アリオスペーパー、キッズ☆アリペ、エンゲキ☆アリペなど、媒体が豊富にあって、Twitterも地方都市の中ではそこそこのフォロワーがいる。そのメディアをどう使えば街に好影響を与えるか、地域社会にどう貢献できるのかを広報の視点から考えることが大事。（長野）

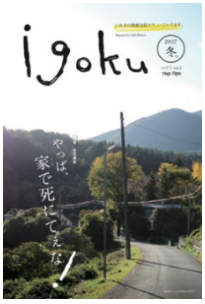
□ 広報は事業の付属物ではなく、広聴的な役割を果たして館全体を引っ張っていくべき

- 劇場の仕事の中の花形は、公演制作・プロデュースという考え方は当然ある。でも私は、「こういうアーティストと信頼関係があって劇場に呼べます」という考え方は、20世紀的だと思う。（長野）
- これから強く言っていかなくてはいけないのは広報の在り方。広報は劇場の事業の付属物というポジションだと思われている。そうではなくて、広聴という概念を持って回していくセクションが広報で、それそのものが事業なのだということを、公立文化施設は、しっかり認識したほうがいい。（長野）
- 市民との関係性の窓口として、広報なり広聴を置く。事業として、セクションとして位置づけるべきだし、必要な予算を用意することが、これから生き残っていく上では必要ではないか。（長野）
- 自分より上の世代の人たちは、広報はどちらかというと事業のための付属物で、チケットを売るためと思っている方が多い。アリオスだと文化施設全体の評価も広報が担当している。それを踏まえて、今後の事業や施設の在り方、戦略、そういったものの先頭を切っていくのが広報なのではないか。広報的なことだけを担うセクションではない（長野）

⑶ より広い関係性の構築へ向けて

90年代以降、芸術監督を置く公共劇場ができ、プロデュース公演やレジデントカンパニーなどさまざまな取り組みが進んできた。一方、2017年に改正された「文化芸術基本法」に基づいて、翌年閣議決定された「文化芸術推進基本計画」の中では、「地域の文化芸術を推進するプラットフォーム」が4つの目標の一つに設定されている。しかし、そのプラットフォームを担う拠点となりうる地域文化施設において、必要とされる人材のイメージは未だ確立途上にあるといえる。長野さんのように、編集者的な視点で文化芸術やその周辺に集まるコミュニティ（文化的コモンズ）を編み、共創型で文化からの地域振興を担う人材が、地域の文化芸術拠点にコ

*7：いわき市包括ケア推進課の取り組み。高齢者の生き方についてユニークな視点で掘り下げるウェブメディア、フリーペーパーを発行するほか、いわきアリオスを会場に「igoku Fes」を行う。
https://igoku.jp/



紙のいごく創刊号（2017 年）
いわき市地域包括ケア推進課

ーディネーターとして存在することは、今後の地域文化施設のあり方を考えるうえで、大きなヒントになる。

長野さんは、いわきアリオスが今後その活動の裾野を広げていくためには、さまざまな機関・団体との協働が不可欠だと考えている。その時に、これまでのように「媒体」をつくることから始めることも有効だろう。あるいは、アウトリーチ事業の「おでかけアリオス」を再編することも一案だと考えられる。しかしそれ以上に重要なのは、どこまで市民に任せられるか、担い手が増えていくかということだと長野さんは指摘する。いわきアリオスは、市民の中でその役割が循環するように次世代への目配りも怠っていない。それも地域においてコーディネーターによる多層的な取り組みを推進する上で重要な点だと考えられる。

グループインタビュー参加者からは、今後地域のプラットフォームとして、いわきアリオスやコーディネーターが活動するために、既存の連絡会や市役所のシステムを活用すべきといった具体的な提案もあった。

長野さんは、その未来に、人がそれぞれの創意工夫や創造性を起点に、思いやりある社会を形成していくということを見据えている。それは、地域文化施設やそこに働くコーディネーターが目標とすべき社会の姿だといえよう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 多様な連携と任せる関係の必要性

- 正直、アリオスが単体で提案するのは限界がある。例えば商工会議所や医師会、あるいは経済団体の人たちと会議体をきちんと組織して、社会をより良くするための投資対象としての芸術について説明する。医療や介護の人たちにも、芸術文化と福祉の協働事例を紹介して、病院や介護の現場で役に立てることはありませんかと尋ねるなど、日常的に話ができる場所が絶対的に必要だと思っている。（長野）
- いわき FC（JFL 加盟）サッカーチームは「スポーツによる人・まちづくり推進協議会」を設けている。芸術文化の周りにはそういうものはない。会社の経営者にとって役に立てることはもちろん、医療現場、病院の中の掲示板ひとつとっても、アーティストを連れて行って、こういうことができますよということすらも、まだ提案できていない状態だから、そういうレベルのことからやっていきたい。（長野）
- それをテーマにした媒体をつくってもいい。「社会と芸術」というキーワードでアーティストにも出てもらい、医療機関での取り組みをいろいろな人たちと共有して、うちも、うちもと広がればと思う。そのために当館に寄付などをしてもらって、それで媒体をつくって回していけるとなおありがたい。igoku 編集部（*7）の人たちと、それを下支えするようなものを構築できないかなと妄想している。（長野）
- 重要なのは、市民にどれだけ権限を委譲できるかである。担い手が増えていって、その予備軍が待機できるようにするため、僕らが目配りをして、将来の人材をどのように成育するのかが大切。（長野）
- NPO 法人 Wunderground の主要メンバーは次々と起業している。そのベースには「将来のまちの文化」を考える態度が身についてきたと感じる。（阿部）
- 基本的には自分たちが好きなことをやる、イベントのような形になっているが、後に文化になっていくような形で続けられるといい。運営する人が育つような寄り添い方や、支え方をしている。そのような地域におけるコーディネーターの育成、支援に関しては、アリオスを見習った部分がある。アリオスに限界がある部分を NPO として裾野を広げる役割を担っているという自覚がある。（阿部）

□ 子育て団体との連携

- 今、新型コロナの状況下で、キッズルームは遊具も撤去して稼働率がゼロに近い状態になっていた。自分たちでは対処できないから、子育て支援団体などに、常に誰かがいて、衛生管理、消毒などをきちんと行ってプロ

グラムを継続的に提供したいと募集したら、６組の団体が応援してくださった。（長野）

- それぞれの団体が、自分たちのプログラムを持ってきてくれたが、キッズルームのような半公開の場所で行うことによって、それまでとは違う人たちが寄ってくれるようになった。（長野）
- このように、子育て支援に関して言えば、一翼を担えているという感触が出てきた。その人たちとつながったことでより効果的に、子どもたちに対してのアプローチができたり、こちらからも貢献をしたり、逆にアリオスの告知などをお願いするなど、持ちつ持たれつの関係性ができたりした。それで、常にビビッドな情報が入ってくる。（長野）
- その関係性の中で、収入格差などの課題がある地区の子どもたちに対して、アリオスがきちんと出かけて、引きこもっているママたちに何かしてあげないと駄目だよというアドバイスをもらった。すると、どうしたらいいのかを考えるようになる。日常的に付き合いができる関係と、その関係性をアップデートできるシステムをどうつくるかということが、すごく大事だという気がする。（長野）

□ コロナ禍を機に、おでかけアリオス（アウトリーチ）を再編成する

- 今、コロナの影響で、学校アウトリーチも体育館での実施が主体になってしまっている。「おでかけアリオス」のスタイルだった小さな空間で子どもたちの近くで行うという方法が、完全にはできない。（長野）
- さらに立ち上げ当初からの担当がいなくなって、学校以外の地域でのアウトリーチというのがここ数年、全然できていない。（長野）
- アリオスペーパーの編集部員だった方や、アリオスコミュニティの人たちが、従来のアウトリーチだけでは足りないよねと言っている。いわき交響楽団や地元のダンスカンパニーの皆さんなどが、地元の人たちに対して行っている活動も含め全体像をきちんと見て、地域そのものに文化芸術を浸透させるようなことをやらないと、アリオスだけが、しかも学校だけで行うというのはもったいない。（長野）
- 市民の皆さんにどこまで仕事を委ねていくか。そのためのコーディネーターは市民自身がいいのか、あるいは、地元出身アーティストを中心に研修・実践を積み重ねてきたおでかけアリオス研究会で育った人たちがコーディネートし、育成もやれるようになるのがいいのか。そういうことを再編成するべきだと思う。やはりアリオスの問題だけとして考えていたら、先はないと思っている。（長野）
- 「おでかけアリオス」は学校中心になっているが、地域でやってもらうともっと地域の人が集まれるし、もっと膨らましていけると感じている。各地域で、アリオスの応援団ができるとさらにいい。（下山田）

□ 市関係者からの提案

- 学校やアリオスとのつながりをコーディネートできる人がいるといい。（稲田）
- 地域振興担当員の会議にアリオスが出張っていくといい。（下山田）
- おでかけアリオスの情報を市役所の職員ポータルサイトに載せてもらえると、興味のある職員にリーチできる。（下山田）

□ 創意工夫する心に寄り添う機関として

- 人を思いやる心や、創意工夫する心が広まっていくことによって、人をパワハラ、モラハラのような感じでマウンティングするのではなくて、理解し合いながら、傷つけ合わないように暮らしていく社会のために、創造する心などが生きていくといいなと思っている。それを、なるべくいろいろな人と価値観を共有しながらやっていけるといいと思う。（長野）